

康有為における「神道設教」

小林 寛

要旨

康有為における「神道設教」は儒教が宗教であることを説明するとき用いられた聖人が天地の靈妙な働きを尊崇して祭儀を設け教世の教主となることを指している。孔教の教主は孔子であって、孔子は神道によって教を設け、同時に人間世界に重点を置いて、人道によって教を立てているとする。康有為にとつての孔教は、神道と人道とを一つにする最も優れた「教」であることになる。康有為の「神」とは人の精神活動の働きにも通ずる、かたちなき力を指している。その働きは元なる氣に由来し、天地と質を同じくし天地に遍満する以太に根拠をもつものであった。くすしき働きの持つものが神であるとき、神異も四季の移り変わりという靈

はじめに

本稿においては孔教運動の東アジアにおける展開という観点から、康有為の宗教に関わる易経に由来する「神道設教」の解釈をと

明であり、微妙なる天地の働きも神であることになる。康有為はこのうちはなほだしい場合には淫祀にもなりかねない神靈を意味する神異は退けて、天地の働きを敬し人道に重きを置く国教としての孔教によって国家をまとめようとした。人間世界に重点を置くからと言って儒教は宗教ではないとする説を批判していて、儒教が宗教であり、国教である限り宗教としての祭儀が執り行われることになる。儒教は聖人によって神道を以て設けられたものであるとすると、靈妙な天地の働きに対して敬意を表し、靈妙な天地の働きを言葉によって人間世界に示した教主が尊信されることになる。

キーワード 康有為 神道設教 宗教

りあげ、彼の宗教観を考察しておきたい。孔教を主唱する康有為は西洋列強に対抗しうるには精神的支柱として、キリスト教に対抗しうる宗教化された儒教がなければならないと考え、一八九八年六月、孔子の経典を尊重し、国教と為し教部と教会とを設け、孔子紀年を

採用し、淫祀を廃すべきだとの上書を光緒帝に奉じた。

康有為は儒教が哲学であり教育説であり宗教ではないとする立場を批判する。孔教は宗教であって、宗教には神道と人道との両面があるとすると、孔教は人道に重きを置くものであり真文明の教であるとする。孔教が人道に重きを置くとき、対比としての神道の側面についての考え方を明確にすることが求められる。神道についても易経に由来する神道と、日本の神道²とがあつてふたつは区別されなければならない。そこで本稿では易経に由来する「神道設教」についての康有為の解釈をとり上げることとした。「神道設教」の解釈については康有為の弟子である李炳憲の解釈もあつて、両者は同じく孔教を提唱しつつも、この語の解釈には差異を見せる³。人道を神道よりも重視する康有為は現実世界において理想世界を実現する根拠として神を位置付けている。本稿においては康有為における「孔教」「宗教」「神道設教」「神」の順に見て行くこととしたい。

1 康有為と孔教

康有為によって主張された孔教の、儒教改革論の論拠として、康有為の公羊学を始めとする今文経学の立場がある。

『新学偽経考』では、「古文經典」は王莽の「新」王朝において劉歆によって偽作されたものであるとし、これを新の学の意で新学と称して批判している。古文經典は偽作で、孔子の真意は伝わらないとし、古文經典の伝統とは異なる今文經典の伝統による儒教を掲げる。『春秋董氏学』では、孔子が春秋に微言大義によって潜めたものが公羊三世説に見ることができるとし、時代の発展と制度改革の

根拠としている。「孔子改制考」では孔子は祖述者ではなく、昔の聖王に仮託して制度の改革を求めた「託古改制」の創始者だとする。すなわち、孔子は儒教の創始者であることになる。さらに「大同書」によって世界が大同へと向かう未来の理想世界が描かれる。

『孔子改制考』『新学偽経考』『董氏春秋学』は儒教を国教化する根拠として康有為自身にも意識されていたもので「請尊孔聖為国教立教部教会以孔子紀年而廢淫祀折⁴」においてはこれらの著作が「宸覽」を乞うものとしてあげられていて、次のように言う。

奏するに孔子改制考、新学偽経考、董子春秋学を進呈するを為し、敬しみて宸覽に備へんとす。教部教会を設立し、並びに孔子紀年を以てし、民間の廟に先聖を祀るを聴きて、淫祀を罷廢して以て国教を重んずることを乞ひ、恭摺して聖鑒の事を仰祈す⁵。

ここでは「皇帝陛下にもうしあげるのに」「孔子改制考」「新学偽経考」「董子春秋学」を進呈して、敬しんで宸覽に備えたい。教部と教会とを設立し、並びに孔子紀年をもちい、民間の廟には先聖を祀ることをみとめて、淫祀を罷廢してそして国教を重んずることをもとめるもので、恭摺して聖鑒の事を仰祈する⁶という。ここからすると、『孔子改制考』『新学偽経考』『董子春秋学』という著作が皇帝に儒教を国教化することを勧める論拠を示す著作と位置づけられていることがわかる。清王朝が立憲君主制を採ろうとした場合に国教として相応しい教えは儒教であつて、改革された儒教である孔教が採用されるべきであると康有為には考えられていた。

窃かに惟るに孔子の聖は光日月と併び孔子の経は流くこと江河に亘る。豈に臣愚を待ちて賢発する所ならんや。惟ふに中国は尚ほ多神の俗を為し、未だ専ら教主を奉じて以て徳心を発するを知らず。子を祈れば則ち張仙を奉じ、財を求むれば則ち財神に供へ、工匠は則ち魯般に供へ、甚だしきは士人の学に通ずるものも乃ち跳舞の鬼、号して魁星と為すものを拝す。学宮巍楼在る所、高高として座し鎮り、之を冒する士夫齊しく祈り膜して拝し羞恥を知らず。凡か其の学ぶ所何学を為すかを忘る。

ここでは「ひそかにおもいはかると孔子の聖の光は日月とならび、孔子の経は長江や黄河のようにしき亘っている。どうしてわたしを待ってあらわれるものであろうか。おもうに中国はまだ多神の俗を為していて、まだもっぱら教主を奉じて徳心を発することを知らないでいる。子を祈れば張仙をたてまつり、財を求めめるには財神に供えものをし、工匠は魯般に供えものをし、はなはだしいのは士人の学に通じたものであっても跳ねて舞うたましいや、魁星というものを拝んでいる。学宮やたかい楼が在る所に高だかと座し鎮まっています、これをまもる士夫はみな祈り拝して羞恥を知らないでいる。学んでいるところは何学なのかを忘れている」という。

ここからすると淫祀ともいへき神異を拝む教は批判されている。教主を奉ずる儒教が尊ばれていることがわかる。従来の教主無き儒教を、教主を奉ずる儒教たる孔教へと変革することが、国教としての儒教すなわち孔教のありかたで、そのように変革されることが儒教に要請されている。康有為において儒教の教主は孔子でなければならぬとき孔子は祖述者ではなく創教主と位置付けられる。

夫れ神道もて教えを設るは聖人の許す所にして郷曲は必ず廟賽を捧るは是れ資なり。而して牛神蛇鬼、日に香火を窃み、山精木魅、謬りて廟祠を設け人心を激励する所無く、俗を尚ほ風導する所無し。徒に妖巫に欺惑せしめられ、神怪に人を驚められて、虚しく牲醴の資を糜し、日に香燭の費を竭す。而して欧美に遊ぶ者、視て野蛮と為し、像を拍ちて専視し、以て笑柄を為し、中国を爪哇・印度・非洲の蛮俗と等しくするのみ。国に大恥を為し民に少益無し。夫れ民を教え俗を正し礼を修め教を重んずるは此れ豈に細故ならん哉⁷。

「そもそも「神道設教」は聖人が許す所であって郷曲は必ず廟賽を捧るのは資である。しかし牛神や蛇鬼が日に香火を窃み、山精や木魅が謬りて廟祠を設けられても、それらは人心を激励する所もなく、俗をなお風導することもない。いたずらに妖巫に欺惑されて、神怪に人を驚められて、虚しく牲醴の資をついやし、日に香燭の費をつくすばかりである。そして欧洲や美国に遊ぶ者は、これを視て野蛮だとし、像を拍ちて専ら観るばかりで、笑柄を為し、中国をジャワ・インド・アフリカ洲の蛮俗と等しいとするだけである。国に大恥をなし民に少しも益がない。そもそも民を教え俗を正し礼を修め教を重んずるのは、これがどうして細故であることがあろうか」とここではない。

ここに「神道設教」という語が出てくる。「神道設教（神道によって教えを設ける）」は聖人が許したところであっても、中国に神異による民俗信仰が盛行しているのを欧美に遊ぶ者が見たら、中国がジャワ・インド・アフリカのような野蛮な国だとみるだろうと述

べるところからして、国教は正学であり淫祀を排した儒教によらねばならないと考えられている。康有為においては神異を主とする教は教主を奉じる国教たりえない。

夫れ大地の教主、未だ神道に托らずして以て人を尊信せしめるものは有らず。時に地に之を為し、神道を假らずして能く教主を為すものは、惟だ孔子の真文明世の教主のみ有り、大地に無き所也。

「そもそも大地の教主で未だ神道によらないで人を尊信させたものはない。時に地にこれをなして、神道を假ることなしによく教主となつたものは、ただ孔子の真文明世の教主であり、大地になつたところである」という。大地の教主で「神道」を仮託しないで教を立てたものはないということから、佛教も道教も基督教も回教も神道によって教を立てていると考えられていることがわかる。宗教たる儒教は人道に重きがあるが故に中国において尊崇されるにふさわしいと考えられている。同時に儒教は人道のみによるのではなく、神道をもそのうちに包含しなければ将来の大同に向かう力とはならない。孔子は「中国の教主」であり「改制の教主」であるとして、他の教主が神道に偽託して人を尊信させるのは異なり、神道に仮らずして教主となつてゐるのは孔子のみで、孔子こそは神道と人道とをふまえているその両者をつつにする「真文明世の教主」であり、これこそこれまで大地にないところであると康有為は強調する。

夫れ中国人を挙げて皆孔教也。將に教を治め途を分かたしめん

と欲すれば専ら職業以て之を保守せしむるに若くは莫し。官に教部を立て地方に教会を立てしむ。首に宜しく制を定め、国を挙げて淫祀を去り棄てしめ、京師城野省府縣郷自ら皆孔子廟を獨立せしめ、以て孔子を天に配し人民男女皆之に祠謁し積業奉花せしめ、必ず聖經を黙誦せしむ。郷市に在る所、皆孔子教会を立て、士人の六経四書に通ずる者を公挙して講生と為し、七日を以て休息し、聖經を宣講し、男女皆聴く。講生は奉祀生を兼ね聖廟の祭祀洒掃を掌る。郷の千百人に必ず一廟、廟毎に一¹⁰生、多くの者之を聴く。

「そもそも中国人は挙げてすべてが孔教である。將に教を治め途を分けようとねがうのであれば専ら職業によつて保守させるのがいちばんよい。官に教部を立てさせ地方に教会を立てさせる。はじめに宜しく制を定め、国を挙げて淫祀を去つて棄てさせ、京師・城野・省府縣郷からすべて孔子廟を獨立させて、そうして孔子を天に配し人民の男女がみな、これに祠謁し積業奉花できるようにし、必ず聖經を黙誦させるようにする。郷市がある所には、すべて孔子教会を立て、士人で六経四書に通ずる者を公挙して講生とし、七日をもつて休息し、聖經を宣講し、男女がみな聴くようにする。講生は奉祀生を兼ね聖廟の祭祀洒掃を掌る。郷の千百人に必ず一廟、廟毎に一生、多くの者がこれを聴くようにする」という。康有為によればすべて中国人は孔教であるという。儒教を国民が尊重するための方法として職業によつて儒教を保守させることを述べている。中央に教部を設け、地方に教会を立てさせ、まず制度を定めて淫祀を去り、国内の処々に孔子廟を獨立させて設けること、孔子廟では孔

子を天に配享し、男女百姓が誰でも参拝し、糞棄、奉花し、聖教を黙誦し、村落ごとに孔教会を設けることを具体策として提案している。民間の男女が誰でも孔子の廟堂に奉参し、信仰の自由によつて、祭天儀礼も天子の特権ではなく、百姓が誰でも天を祭祀することができるようにすべきだと言う。そして、孔教会の教職者として郷の講生、司の講師、縣の大講師、府の宋師、省の大宋師、全国の祭主を職別に設定しようとする。七日ごとに休職し、經典を講論し百姓が聞くことができるようにし、祭祀を行うようにすべきだとも言い、ここには基督教の教会組織が念頭に置かれて孔教会の組織が考えられていることが表れている。

2 康有為における宗教

孔教が宗教であるとするとき、康有為の宗教観を確認しておくことが必要であろう。康有為の宗教に関する言説は多い。その中で英語の Religion の訳語に言及して宗教の語義を述べているのが以下の部分になる。

或るもの謂ふ、各国の宗教は皆神道を主とし、孔子は既に神を語らざれば則ち教主に非ざるなり、と。愚儒一孔、遂に敢て孔子は只だ哲学政治教育の名家と為すべしと妄議し、僅かに之を希臘の索格底、柏拉図之列に侷ぶるは、此れ日人の儒教を知らざる謬論自りす。而に吾国の東学、或は蔽惑する所と為り、祖師の其の説を誤りて自ら其の教を捨るは、尤も愚謬の甚だしき者也。夫れ中国数千年、儒釈を言へは只だ教と曰ふ而已矣にし

て、神人の別無き也。今人の宗教と称する者、名は日本従りして日本は英文の釐里近 Religion 自りする耳。日人は二字を習用するが故に佛教の諸宗を以て加疊して詞を為し、其の意は実に神教と云ふ爾。然るに釐里近の義、実に神教を以て之を尽くすこと能はず、但だ久しく耶教の形式の固る所、幾かは神に非ざれば無教と云ふが若きと為る爾。然に教にして宗を加へば義已に妥からず。佛回耶の皆な神道を言ふに因りて神教と為す可也とし、遂に孔子を以て神道と言はざれば即ち教と為すを得ずと謂ふが若きは、則ち二五を知りて十を知らざる者也。¹¹⁾

ここでは次のように述べている。「各国の宗教は皆神道を主としていて、孔子は既に神を語らないのであるから則ち教主ではない、とあるものはいふ。愚儒一孔、とうとう敢えて孔子はたんに哲学・政治・教育の名家とすべきだと妄りに議うことになって、わずかに孔子をギリシアのソクラテス、プラトンの列にならべるのは、これこそ日本人が儒教を知らなかった謬論からくるものである。そして吾が国の東学が、あるいは蔽惑されて、祖師のその説を誤って自らその教を捨ててしまうのは、尤も愚謬の甚だしきものである。そもそも中国数千年は、儒・釈を言うのにはただ教というだけであつて、神・人の別は無かつたのである。今の人が宗教と称するのは、名は日本からきたもので日本のものは英文の「釐里近 Religion」からきたものであつた。日本人は二字を習用するために、佛教の諸宗によつて加疊して詞を為し、その意は実に神教というだけである。しかし「釐里近」のいみは、実に神教によつてこれを尽くすことはできないのであつて、ただ久しく耶教の形式にとらわれたもので、幾か

神でなければ無教というようになってしまふ。そうして教に宗を加えるといみは既になつたものではなくなつてしまふ。佛教・回教・耶教が皆な神道を言うことに困つて神教とするのをよしとして、とうとう孔子が神道と言わないことで即ち教とすることはできないというようなものは、則ち二五を知つて十を知らないものである」と。

ここから康有為の「宗教」の把握は以下のように言えよう。¹² 中国において儒教・仏教については単に「教」と言うだけであつて「教」には神道・人道の区別は無いとする。日本人が英語の *religion* (釐里近) を訳すときに二字を習用し、仏教の諸宗を加疊して詞を為して、神教を語意として「宗教」としたといふ。¹³ 釐里近は神教の意味のみで語意を尽くすことはできないといふ。孔子が神教を言わなくても宗教なのだといふ主張がここにはある。

夫れ、凡そ圓首方足の人為るは、身外の交際、身内の云為、持循何方、節文何若、必ず教有りて以て之を導くを為す。太古草昧にして鬼を尚べば則ち神教もて尊しと為す。近世の文明は人を重んずれば則ち人道もて重しと為す。故に人道の教は実には神教従りして更に進む。要は神道人道を論ずること無くして其の教を為せば則ち一也。譬へば君主の専制主憲の異有るが如し。神道之教主は独尊にして専制の君主の如し。人道の教主は不尊にして立憲之君主の如し。専制の君主を君主と謂ひて立憲の君主を君主に非ずと謂ふこと能はざる也。然れば則ち謂ひて神道を言ふは教と為し、謂ひて人道を言ふは教に非ずと言ひ、佛耶回を謂ひて教と為し、孔子を教に非ずと謂ふは、豈に大妄なら

ず哉。¹⁴

「そもそも、およそ圓首方足である人であれば、身外の交際、身内の云為、持循何方、節文何若、必ず教が有つて以てこれを導くのである。太古は草昧であつて鬼を尚ぶので神教を尊いものとする。近世の文明は人を重んずるので人道を重いものとする。故に人道の教は実に神教から更に進んだものである。要は神道と人道とを論ずること無く、その教を為すのは則ち一とである。譬へば君主に専制と主憲とのちがいが有るようなものである。神道の教主は独尊であつて専制の君主のようである。人道の教主は不尊であつて立憲の君主のようである。専制の君主を君主というのに立憲の君主を君主ではないといふことはできない。そうであれば則ち謂うのに神道を言ふものは教として、謂うのに人道を言ふものは教ではないといひ、佛教・耶教・回教を謂うのに教と為し、孔子を教ではないと謂うのは、どうして大妄でないことがあるか」といふ。

康有為の宗教観は、古代には神道を尊び近世には人道を重んずるように進歩するのが宗教であつて、儒教はよく進歩した教であり宗教であることになる。孔教では孔子をイエスに比して、孔子は儒教の教主であるとする。教部・教会もキリスト教に比されて考えられている。康有為における宗教は「教」であり神道・人道を包含して考えられており、どちらかといへば人道に重きをおいて考えられている。

3 易の「神道設教」と康有為の解釈

先の引用に見た「神教設教」という語は易経に典拠があり易経では「神道設教」は次のように記される。「神道設教」は易の「觀」卦の次の例に表れている。

象に曰く、大觀上に在り、順にして巽、中正以て天下に觀す。觀は盥にして薦せず、孚有りて禺頁若、下觀て化する也。天の神道を觀るに而も四時戈心はず。聖人神道を以て教を設けて天下服す。¹⁵

易における「神道設教」の語は觀卦の象伝に見られ、天の神道は四時戈心わないということを主旨とする文で、秩序有るくすしき法則を神道としている。聖人は神道をもつて教を設け天下が服すというのであるから、法則になつた道を聖人がしめすことになる。易経に云う「神道」は天地至神の道を指し「神道設教」は天道をもとにして教を設けるならば天下の者はみな服することをいって、必ずしも神異を語るものではない。

これに対して孔教を言う康有為は「神道設教」が儒教が宗教であることの根拠とし、孔子の教を単に現世の政治あるいは哲学あるいは教育に過ぎないとする説に反論している。そこで以下には康有為の「神道設教」についての考えを掲げておきたい。

或るもの宗教は必ず神道を言ひ、佛回耶皆な神を言ふが故に宗教為るを得、孔子は神道を言はざれば宗教為らずと謂ふもの有

り。此れ等の論說尤も奇愚なり。試みに今人の認を問ふ。教の一字有るは何従り来るかと。秦漢以前、経伝の教を言ふ者、教ふるに勝ふ可からず。是れ豈に亦た佛回耶なる乎。斯の如きの説を信ずれば佛回耶の未だ中国に入らざる前は、然れば則ち中国数千年無教の国と為す耶。豈に徒に自ら貶め、亦た自ら誣するの甚だしき矣。夫れ教の道を為すは多し矣。神道を以て教を為すもの有れば、人道を以て教を為すもの有り。人と神とを合て教を為すもの有り。要は教の義を為すは皆な人を使って悪を去りて善を為さしむるに有る而已。但だ其の用法同じからず。聖者皆な是れ医王にして並べて権実を明めて双ながら之を用ふ。古へ者民愚にして陽冥の中、事事物物皆な以て鬼神と為す。聖者其の明かにする所に困りて之を怵ずれば則ち畏る所有りて悪を為さず、慕ふ所有りて易く善に向ふ。故に太古の教、必ず明鬼を多くす。而て佛回耶は乃ち旧説に困りて天堂地獄を為して以て民を誘ふ。今も仏典の地獄を言ふを讀めば尚ほ之が為に震栗す。而て常人城隍廟廊の地獄に循行して亦た動く所有りて過を改る者を多くす。欧亜の人、俗皆な略ほ同じ。此れ耶回の教宗を成して能く大く行はれる所以なり。中世の愚俗に在りては其の人心風俗に益有ること豈に浅鮮ならん也。管子曰く、鬼神を明かにせざれば則ち隨民悟らず、と。孔子亦た言ふ、聖人神道を以て教を設くれば、百衆以て畏れ、万民以て服す、と。今、六經鬼神を言ふ者甚だ多し。祭祀を爾す者、尤も蔽に、或は天に托して以て賞罰を明かにし、甚だしき者、古來、日月食社稷の五祀亦た之を廢さざるは、此れ神道設教の法也。¹⁶

「ここでは次のように言う。」「或るものは宗教では必ず神道を言い、佛教・回教・耶穌教はみなすべて神を言うのであるから宗教であるとすることができるが、孔子は神道を言わないので宗教とはできないというものがある。これ等の論説はまったく奇であり愚である。試みに今の人の認をかんがえよう。教の一字があるのはどこから来たのか、と。秦・漢より以前に、経・伝で教を言うものは、教えるのに勝ることができないくらいおおい。これがどうしてまた佛教・回教・耶穌教であろうか。このような説を信じるならば佛教・回教・耶穌教がまだ中国に入らない前は、そうであるならば中国数千年は教えなき国だったとするのであるか。なんといたずらに自ら貶め、また自ら誣することの甚だしいものではないか。そもそも教の道を為すものが多い。神道を以て教を為すものがあれば、人道を以て教を為すものがある。人と神とを合わせて教を為すものもある。要は教の義を為すのはみな人から悪を去らせて善を為させるためにあるだけである。ただその用法は同じではない。聖者はみな帝王であつて、権と実とをならべて明らかにしてふたつながらにこれを用いる。いにしへの民は愚かであつて、陽と冥との中で、事事物物はみな鬼神だとしていた。聖者はその明かにする所によつて、これをあわれんで畏れる所があつて悪を為さないようにし、慕う所があつてたやすく善に向かうようにさせたのである。だから太古の教は、必ず明鬼を多くしていた。そして佛教・耶穌教・回教は乃ち旧説に因つて天堂と地獄とを為すことでそうして民を誘つた。今でも仏典の地獄を言うのを読むとなおこのせいで震えるし栗れる。そして常人が城隍や廟廊の地獄に循い行けば、また、動く所があつて過ちを改める者を多くする。歐洲とアジアの人は、俗はみなほほ同じ

である。これが耶穌教・回教の教宗を成して能く大に行われる所以である。中世の愚俗にあつてはその人心と風俗とに益あることはどうして浅く鮮ないであろうか。管子はいう「鬼神を明かにせざれば則ち陋民悟らず」と。孔子も亦た言う「聖人神道を以て教を設くれば、百衆以て畏れ、万民以て服す」と。今、六経で鬼神を言うものはとても多い。祭祀を爾す者は、尤も嚴に、或は天に托して以て賞罰を明かにし、甚だしきは、古來、日・月・食・社・稷の五祀は亦たこれを廢さないことは、これは神道設教の法である」と。

康有為は中国に教がないとか孔子を非宗教家だとするのは自ら貶める物言いでであると考へ、祭祀を行うことは「神道設教」の法であると述べている。先に康有為は孔子は神道をからずして教を立てていと述べている。ここでは孔子の教には神道が含まれていると述べる。孔教においては人道に重きを置きながら神道も包含されるとされる。祭儀は神道に関わるものと位置づけられている。天地の働きはくすしく靈妙であつて、未だ豁然として貫通した状況を迎えていない普通の人間にとつては、その働きは通常の人知を超えて出ている。だからと言つて神がかりを求めて踊り跳ねて神祭りをすることは淫祀に墮ちる。天地の靈妙な働きは人知を超えていても、これを祀る祭儀は人間の通常の世界にあることになる。孔教は人道に重きを置くのは祭儀の形式面についても言えることであつた。「孔子の易は皆な人事を切に言ふ。后儒天道を言ひて人事を言はざるは非なり」と康有為は述べていて易の「神道設教」も人事を目的に設けられていたものとされていることがわかる。

「神道設教」によつて聖人は祭儀を設け救世の教主となる。孔教の教主は孔子であつて、孔子は神道によつて設教し、同時に人間世

界に重点を置いていのであるから、人道によって教を立てていることになる。こうして教主を奉ずる儒教は神道と人道とを一つにして将来の大同世へと向かう孔教であることになる。

4 康有為における神と霊と

康有為は人をはじめとして万物の靈魂について魂と魄とに分けて考えている。それをささえるものが神の働きであった。「大同書」において康有為は「神」について次のように説明している。

孔子曰く「地、神氣を載せ、神氣風霆、風霆形を流き、庶物露はれ生る」と。神とは知を有する電なり。光電、能く伝はらざる所無く、神氣能く感ぜざる所無し。鬼を神にし帝を神にし、天を生じ地を生じ、全神と分神とは惟れ元惟れ人も。微なる乎、妙なる哉。其の神の触ること有る哉。物無くんば電無く、物無くんば神無し。夫れ神とは知氣也。魂知也。精爽也。靈明也。明德也。数者名を異にして実を同じくす。¹⁸

ここでは次のように言う。「孔子はいう「地が、神氣を載せ、神氣は風霆であつて、風霆が形を流き、庶物が露われ生れる」と。神とは知を有する電である。光電はよく伝わらない所がなく、神氣はよく感じない所がない。鬼を神にし、帝を神にし、天を生じ、地を生じる。全神と分神とは惟れが元であり惟れが人である。微なるかな、妙なるかな。その神の触れることがあることは。物が無ければ電もなく、物が無ければ神も無い。そもそも神とは知氣である。魂

知である。精爽である。靈明である。明德である。数者は名を異にしていられるけれども実を同じくする」と。

ここでの神は物の造化の働きを意味している。この力は人間の精神の働きに通ずる。しかしながら人間の精神の働きとは神経線維に支えられてある神経組織の働きを意味するのではなかった。いわば人体組織を超えた光線や電気によって宇宙に通ずる力として考えられていることが理解される。人間の心理は神によるものであつていわば物理に根拠をもつものであることになる。仁愛の力は物理の力であった。人間は自分の精神を宇宙にも至らせうる。天地が万物を生む力を人間の仁の根拠とすることは儒教の伝統の「仁は天地生物の心なり」²⁰とする理解を推し進めたものとみることが出来る。康有為はこれを光電の知識によって説明して深めている。大同に向かう力の根拠が元なる氣にあり、氣の中に行きわたる神にあることが明示されている。

神は諸天之外に遊び、想は血輪の中に入り、時に白雲山摩星嶺の頭に登りて、蕩蕩乎として其の八極に驚す。²¹

吾朝夕書を是に擁し、俛しては説み仰いでは思ひ、神を澄まし形を離れ、帰りて斐兒に対へば、熱然として人に非ざるが如し。²²

「神は諸天の外に遊び」「神を澄まし形を離れ」というのは比喩としての表現でありながらも康有為には「諸天講」²³の著作もあり、神は体を離れて諸天にまで至ると考えられている。「諸天の表は目

本々相ひ見、神常に与に遊ぶ²⁴」として人間の精神は肉体を離れて宇宙にまで到達しうるものといえる。

それ生物の知有る者は脳筋に靈を含む。其の物と非物と触遇するや、即ち宜有り不宜有り、適有り不適有り。其の脳筋において適且つ宜なる者は則ち神魂これがために楽しみ、其の脳筋と不適不宜なる者は則ち神魂これがために苦しむ。況や人においてをや。脳筋は尤も靈にして、神魂は尤も清也²⁵。

「そもそも生物の知があるのは脳筋に靈を含むからである。その物と非物とが触れ遇うならば、即ち宜があり不宜があり、適があり不適がある。その脳筋において適であり且つ宜なるものは則ち神魂がこれがために楽しみ、その脳筋と不適であり不宜であるものは則ち神魂がこれがために苦しむ。況や人においては、脳筋は尤も靈であつて、神魂は尤も清らかである」という。人間の脳には神魂があつて苦樂を覚知する。魂魄が万物を知覚するのは神の力によつてゐる。

ところで、神とは儒教の伝統においても祭儀と関わるものであつた。「礼記」の「祭義」には次のようにいふ。

建国の神位は右は社稷にして、左は宗廟也²⁶。

宰我曰く、吾鬼神の名を聞くも其の謂ふ所を知らず、と。子曰く、氣なる者は神の盛んなる者也。魄なる者は鬼の盛んなる者

也。鬼と神とを合はすは、教の至り也、と。「氣とは嘘吸出入する者を謂ふ也。耳目の聰明を魄と為す。鬼神を合はせて之を祭るは、聖人の教へ之を致す也。」²⁷

建国の神位の位置は右が社稷であつて左が宗廟となるといふ。儒教を尊信した国は都の宗廟と社稷を配置するときはこのに基づいた。社稷も宗廟も国家の祭儀の重要な施設であつて、ここには社稷には土地の神が宗廟には王家の祖先が祭られていて、神が国家の祭儀と密接な関係にある。人魂は鬼であり生育・造化の力を神とする時、鬼と神とを合せて祭ることは教の至れるものとされる。孔教が国教であることを目指す限りこの記述を無視することはできない。「礼記」の「祭法」には次のようにいふ。

山林、川谷、丘陵の能く雲を出し、風雨を為し、怪物を見ずを皆な神と曰ふ。天下を有つ者は百神を祭る。²⁸

ここでは山林、川谷、丘陵が能く雲を出し、風雨を為し、怪物をあらわすようなことをすべて神というとする。これに対して人は人間の常識の世界で祭儀をつかさどる。天下を有する者は百神を祭る。祭儀を人道とすることになる。神に注目して天地の造化を語ることは宗教としての祭儀を重んずることに関わる。

凡そ茲の祭儀は皆用ひて殺さず、死すれば則ち之を化す。孔子徹蓋を以て犬を埋め、徹帷をもて馬を埋む。待するに人道を以てす。それ仁愛の至り歟。²⁹

孔子は動物に対しても待するのみに人道を以てしたのであって仁愛の極みであるという。康有為における「人道」については機会を改めて論ずることとしたい。動物に対しても万物に対しても気を同じくし神を同じくするものとして人間の仁愛を以て祭儀によって待するものが人道に重きを持つ教ということになろう。

おわりに

康有為の「神」とは人の精神活動の働きにも通ずる、かたちなき力を指している。その働きは元なる氣に由来し、天地と質を同じくし天地に週満する以太に根拠をもつものであった。くすしき働きを持つものが神であるとき、神異も神であり、四季の移り変わりという靈明であり微妙なる天地の働きも神であることになる。康有為はこのうちはなはだしい場合には淫祀にもなりかねない、神靈を意味する神異は退けて、天地の働きを敬し人道に重きを置く国教としての孔教によって国家をまとめようとした。人間世界に力点を置くからと言って儒教は宗教ではないとする説を批判していて、儒教が宗教であり、国教である限り宗教としての祭儀が執り行われることになる。儒教は聖人によって神道を以て教を設けられたものであるとすると、靈妙な天地の働きに対して敬意を表し、靈妙な天地の働きを言葉によって人間世界に示した教主が尊信されることになる。康有為における「神道設教」は儒教が宗教であることを説明するものとして用いられている。そしてその内容は「神道設教」によって聖人が天地の靈妙な働きを尊崇して祭儀を設け救世の教主となることを指している。孔教の教主は孔子であって、孔子は神道によっ

て教を設け、同時に人間世界に重点を置いて、人道によって教を立てている。こうして康有為にとつての孔教は、神道と人道とを一つにする最も優れた「教」であることになる。

註

- 1 康有為「請尊孔聖為国教立教部教会以孔子紀年而廢淫祀折」国家清史編纂委員会「康有為全集」第2集中国人民大学出版社一九九八年96頁を参照されたい。この全集は簡体字によって編纂直されているため、本稿においては日本の常用漢字で記した。
- 2 康有為における日本の神道についての把握は、拙稿「康有為における神道把握」『つくば国際大学紀要』第14号二〇〇八年三月125頁を参照されたい。
- 3 この点については拙稿「李炳憲における神道設教」『目白大学紀要人文学研究』第5号二〇〇八年を参照されたい。
- 4 康有為「請尊孔聖為国教立教部教会以孔子紀年而廢淫祀折」国家清史編纂委員会「康有為全集」第2集中国人民大学出版社一九九八年96頁を参照されたい。
- 5 同上96頁、冒頭部分を参照されたい。
- 6 国家清史編纂委員会「康有為全集」中国人民大学出版社一九九八年96頁を参照されたい。
- 7 国家清史編纂委員会「康有為全集」中国人民大学出版社一九九八年96頁を参照されたい。
- 8 ここでいう「神道」という語は易「觀」卦の彖伝に由来する。
- 9 康有為は孔子が神道によらずして教を設け神道にからずして教

主となつているとする。中国にある教を踏まえて儒教を創教したのであつて神道に全くよらないということではない。康有為「謂尊孔聖为国教立教部教会以孔子紀年而廢淫祀折」国家清史編纂委員會「康有為全集」第2集中国人民大学出版社一九九八年97頁を参照されたい。

10 康有為「謂尊孔聖为国教立教部教会以孔子紀年而廢淫祀折」国家清史編纂委員會「康有為全集」第4集中国人民大学出版社一九九八年98頁を参照されたい。

11 康有為「孔教会叙(二)」国家清史編纂委員會「康有為全集」第2集中国人民大学出版社一九九八年343頁を参照されたい。

12 この記述については拙稿「李炳憲における孔教(2)」『目白大学人文学部紀要』地域文化編第5号15頁を参照されたい。

13 日本におけるReigionの訳語については佐藤喜代治「現代語の語彙の形成」『現代語の成立』明治書院66頁を参照されたい。

14 康有為「孔教会序十月七日」国家清史編纂委員會「康有為全集」第9集中国人民大学出版社一九九八年343頁を参照されたい。「孔教会序」には九月のものと十月のものとの二つがあり、それぞれ「孔教会序(一)」「孔教会序(二)」と区別されることもある。

15 「易経」「觀」卦 象傳を参照されたい。

16 康有為「意大利遊記」国家清史編纂委員會「康有為全集」第7集中国人民大学出版社一九九八年「康有為全集」374頁を参照されたい。

17 康有為「万木草堂口説、易」国家清史編纂委員會「康有為全集」第2集中国人民大学出版社一九九八年155頁を参照されたい。

18 康有為「大同書」国家清史編纂委員會「康有為全集」第7集中

中国人民大学出版社一九九八年4頁を参照されたい。

19 「礼記」「孔子閒居」を参照されたい。

20 例えば「仁説」などの所説を参照されたい。

21 康有為「大同書」国家清史編纂委員會「康有為全集」第7集中中国人民大学出版社一九九八年3頁を参照されたい。

22 同上を参照されたい。

23 康有為「諸天譚」国家清史編纂委員會「康有為全集」第12集中中国人民大学出版社一九九八年1頁を参照されたい。

24 康有為「大同書」国家清史編纂委員會「康有為全集」第7集中中国人民大学出版社一九九八年を参照されたい。

25 康有為「大同書」国家清史編纂委員會「康有為全集」第7集中中国人民大学出版社一九九八年を参照されたい。

26 「礼記」「祭義」を参照されたい。

27 「礼記」「祭義」を参照されたい。

28 「礼記」「祭法」を参照されたい。

29 康有為「大同書」国家清史編纂委員會「康有為全集」第7集中中国人民大学出版社一九九八年を参照されたい。

The Religious Viewpoint of Kang-YouWei (康有為)

Hiroshi Kobayashi

This paper delineates the religious viewpoint of Kang-YouWei (康有為).

Kang-YouWei was born and brought up in the China in the 19–20th century.

He asserted Kong Jiao. Kang-YouWei (康有為) who established the religion, Kong Jiao (孔教), in China. Kong Jiao is composed of two major theories, Ren Dao (人道 religion of people) and Shen Dao (神道 religion of God and deities). His apprentice Lee-ByongHeon put more emphasis on Shen Dao while Kang-YouWei focused more on Ren Dao.

Key-words: Kong Jiao, Kang-YouWei, Religion